

宥菴集

卷之三

三三二

2134



わほむ絲

わのれいやくよどみかきくじゆに。わ（を）うんとある
こくじゆぬさへど。がきだめわけうつたうとせばとひて。いふ
ちかくじゆあらうがは。きまくをなうすだ。さうばい
ばうふ向島うすとみせん地んもほくあくねだ。いきのれかう
うへだへしていがくはなう。かのうあからうと
よせくゆくむ絲（スナホ）は。質朴なるゆくのうづきをまゆび。
夜服。飲食。調度やうのもひそども。身乃ほどよきだ。わ
せそとくめうつたを。うめうとそあはう代。またねう
さうのゆうじゆも。人間を病はうわゆひなりと。いふくゑくゑ
さくまくどうたせ。はうりくえうがきわびて。こまう

わまと正史實縁のゆは。わほやけじゆくと絲（スナホ）

さあせううけきあくうかくうのうれは。うう代のたと
れすがうなどかくのんだうりうれきはくだ。まうが
たうきしらうびひ。まううはううううううううう
あま。あうう歎うは。ううううううううううう
うううううううう。まうううううううううう
ううううう。舞謡のううは。連歌謡詩のううううう
うううううう。かうううううう。かうううううう
ううううう。ううううう。

わのれいやくよどみかきくじゆに。わ（を）うんとある
こくじゆぬさへど。がきだめわけうつたうとせばとひて。いふ
ちかくじゆあらうがは。きまくをなうすだ。さうばい
ばうふ向島うすとみせん地んもほくあくねだ。いきのれかう
うへだへしていがくはなう。かのうあからうと
よせくゆくむ絲（スナホ）は。質朴なるゆくのうづきをまゆび。
夜服。飲食。調度やうのもひそども。身乃ほどよきだ。わ
せそとくめうつたを。うめうとそあはう代。またねう
さうのゆうじゆも。人間を病はうわゆひなりと。いふくゑくゑ
さくまくどうたせ。はうりくえうがきわびて。こまう

アラタニヒルカタハガシテハシタマツカムノナリトキテ。

おおきなひかるの名の下にまほらのうらやましき心
ありたるよ。とくにかは、おまかせだよ。

みどりの葉がまだまろやかでかくふかんたを連く。

うへんをねまう被ぐなり。

おれがやうやくおひるのあむらをもかうのとぞ。や
けなくわゆひくとくへておひるだよ。うがく乃まうだ。おひ
おほからんを。そはさん人のよし。おせたほらんよはあら
たぬなき。とん。あひいはのほく。おゆくとくほく。え
でとくがくをくのよし。おゆくたゆく。からかうてふなにはば
うひのあやまつてゆくとく。こは事實おむねりとある。
海にゆくと。おゆくゆく。おゆくゆく。
こはまむお先板カミバとくかた。おゆくとあくはくと上中れやお見
ゆくかゆくべれ。おゆくおほむね。おゆくおゆく。かゆくおゆく。おゆく

事あきらめたり。ニ善為康朝臣の後拾遺往生傳は
かみもむほまんあくまくのほへがきくはくらま
を。まゆんとよはあくほど。おばくこにまくして。こむ葉
まくちりをへたん日。かのまたけしめかはうつへん。

文化十二年乙亥九月二十五日

醒齋

骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖 一
- 粥木 粥杖 祝木 かひたけ棒 四
- ひひの名義 ひひの假名 六
- 離社 離合 八
- 古書どもに引く離遊 十
- ひひの衣 十二
- 室町家の比付離圖 十五
- 三月三日乃離遊十七
- 土離圖 二十
- 後の離 二十三
- 姫瓜離 二十四
- 湖りくせ破壊 二
- 羽子板 三
- わ乳母日傘と云謠 五
- 離遊の始 七
- 古製離圖 十三
- ひひの比調度 十一
- 又 十四
- 伊勢小米離 十六
- 離繪櫃十九
- 離枕折敷圖 二十二
- ひひの草 二十五

下之卷末

- 勧進比丘尼繪解 一 ○端午茅卷馬二 ○端午頭巾・袈裟三
人形圖并考三 ○後妻打古圖考四
○於國哥舞妓古圖考五
○酸醬を喰ナシ七 ○小兒を愛シバアシナハ
○比丘女九 ○編笠古圖十
○目あらぐら軒のモダメ十二 ○糸縷とくらまがう六
○宿世焼十四 ○虫のたき繪十六
○輪鼓十七 ○見世棚十五 ○かくれあそび十一
○海老上鵝十九 ○子日比遊贋物の比比奈十八
○板風呂湯錢風呂屋二十 ○腰鼓兄弟二
○ねか豆腐田樂豆腐上物二王 ○菖蒲曾再考二十二
○板風呂湯錢風呂屋二十三 ○提燈再考二十四
○行燈再考二十五 ○天和貞享の比の雛人形圖分三十一
○古画行燈挑燈圖二十七 ○虫のたれ繪の追考三十二
○胡鬼板胡鬼子毬杖再考二十八 ○打出小槌追考三十三
○手鞠二十九 ○信濃羽子板圖三十 ○姫瓜節供髮葛子節供三十四
○上編前後二冊の引書。約二三百五十餘種あり。書目とあらふりとある。
○引書の巻のつづきをもととへ。ほくとまきに伏されども。孫引せざる證とて。孫引へることに
伏されど。あくまでも。やむからず。かくさればなり。巻のつづき紙もさへ。一冊の物
字書のたゞひ。伊呂波つけ少せざりのべたゞのあり。写本ハ巻のつづき紙もさへ。あくまでも
伏されど。おのづこ。一本の巻のつづき紙もさへ。あくまでも。

まで五十九條

(一) 雛の假字の事

契沖雜記

古言梯

も此說ふ
れるや。名のみのひと鳴育りて名だるあらぐ。といへり。又或說小

宇津保物語

君の卷 小巢と

とて。種ぐうもあくぬひあるも。おぞもとれゆく。

ひよとあくん。あるゆて。ひよとも。ひともやくらのゆゑふ。ひよかといゆと

ひよとも。ひよとも。玉かつま

十巻の説いそれら不たゞり。あくひよかといゆと

ハ。ひよとひよそりよまだ。かあへりりあとかく。まを。ゐとかけらへたゞり。

といへり。われ此説

ふすと。あくひよかといゆとひよのかかを。むちみれども

本紀

十四卷二比賣那素寐の釋小引。私記のことば。比比奈遊。とあり

江家次第

十七卷立太子の條。ゆも比比奈。とかける古例あれバ。ひよと

かくもひよきよあくざまべ。されどひよと鳴義。とせざるとは云ふ。

ひよかは本あり。ひよとくべ畠言。と末をもふ。鳥のすを。ひよ。ひよ鳥。

などへりくまど。ひよかとねふかけをといひど。あるまうりやも。人形
のたぐひも。てちひまくはくれる細のまをひよかとかけべ。本と本とせらに
似て。又人形のたぐひをひよかとほめそりまも。ふるまきねくへとくか
たまく。齋宮女御集下小ひよか社。とわれど。契沖師の校本をえれば。古本少
ひよかやへとあるよへにて。ひよかまへ。又御堂関白御集のことばがまふ
たまきのまきのれゆめとく。ひよかまわせ後すと。とあれど。下の細きま
ハ。ひよかやにあくとあれば。よふひよかとあるへおぼつかくぞおが
や。かく事を本ふせ。ひよかをようづひよかたわら。又ひよと鳴義を
る説とせば。和名鈔。小比奈。とあると。本の名とせんとむへ。玉かつまの説のどくひ
り。とひよそりよあれひよのかかねくま。われがわうか。ころふ。ひよをよ
とよせざめがく。あはた。とく。謹のひよをよまらせてあきへんでん。今およびひよの
がまをりうれ。われがまくひよかとがくを。いざんと。筆ひよで。かまひよ。

江戸

醒齋輯

山東



正月男童のりくねの越杖（こしのじょう）の元打越の慶風（けいふう）。打越の馬上（ばじょう）の武事をあらわす業（わざ）よく。和漢とも小其事（ちごのこと）。此方の打越を考（か）る。小萬葉集

古法二

神

龜

四年正月數王一子及諸臣子等集於春一日一野而作打越之樂云（うきよ）とあり。神龜ハ聖武天皇の年号也。古記を以りて龜

但書

續紀

後紀錄本

續日本後紀

卷三

美和元年五月の條云戊午

按二天皇

仁明帝御二

武一德一殿一冷一四衛

府一馳一尽一種

馬一藝及打越之熊

和名鈔

雜藝類云打越

萬利（リキナカバ）羅（ロクテイ）向別錄云打越昔黃帝所

造本因兵勢而爲之

同書

雜藝具云打越曲一枝

也。卷を打越の名也。○唐土より黃帝の時始るといひもどりうあらず。唐の傳宗歎（たんのでんそう）よこせを好めり。傳宗帝ハ御闕の貞觀仁一和の比小あされど○遼小られを善擊者也。打越の古事（こじご）。詩篇歌（しざんか）をあすへ。載（のり）たれどそのものみにづらづれらふ拳（こぶし）を打越（こし）と打越（こし）と稱。一種の玩具よろそり。それの比う詳（くわ）らじ。其まくは宇都保物語

ええへ（源平盛衰記）卷二云「法師の首を造て。越杖（こしのじょう）の玉を打ぐ如く。杖を吸て。」
於上丸馳一聘鞠不離杖（こしのじょう）と見えたり（淵鑑類函）卷三百三十一巧藝部八よ。

打越の古事（こじご）。詩篇歌（しざんか）をあすへ。載（のり）たれどそのものみにづらづれらふ拳（こぶし）を打越（こし）と打越（こし）と稱。一種の玩具よろそり。それの比う詳（くわ）らじ。其まくは宇都保物語

小豆をえたり。中比の物よ

應岐國一派。されば時。後鳥羽院を越打の冠者とぞす。祕とあつてあり。行なふべからず。此君あまうに越打の玉をあせそを給へる。文覺をも小わづ口アリスモト」とあり。義經記卷之牛若きさゞめまうじの段。云「かところやうり。きら

ちぬうの御のゆう儀をとどき出。木のうづにりけひくろをばあげりり。びと名材。一ツとば清盛がひとをかけられける。云「袖中抄。新顕昭撰。たまゆら。ちの條。云「十節錄。黃帝云。取蚩尤。頭越之。取眼射之。云。越枝是也。云。以彼例漢土。年始用二件。事國中無凶。事仍日一本一國學。其例一年始打越杖。云「日本歲時記。此詩たゞも。も。徒然草。下巻。云「ささらゆへ。五月小打た。ささらをよ。院より。説あり。」と。神泉苑。出でて焼ゆべるなり。云「招学往來。印作。玄惠法改年月初月招宴。」と。越打。云「後鳥羽院の所時の人事。當時。」と。年始。越杖を打しとされば。五月の技びよもろもあきさり。

○打越樂之圖



詞花堂撰載

宇都保物語

祭使卷。云「

時射

金人

大臣

と。と。と。と。と。と。と。

すひあそぶ。あづのからかやへある。

歎を。はれりいのうりかうげ

ゆづゆふ。うれりとも。まく枝を

りうちて。うれりとも。まく枝を

のく。今。本。まく枝を。帳

作。あやまつれ。まく枝を。これハ四月をうりのこと

おもむろの事ある

うこく。舍人よしども打越樂たかわらののまゆを

アーネスト・ヘミングウェイ

玩具の述枚のりごくべんきょ

されば玩具の越枝ハ打越アリ

直より少くもあらじ打越東の

おを打をまひなうり起まへるべ。

そのうちよ撃枝のまとのひを打ともひくからん打撃ハ鞠うて玉の秋よ

近古の練材の形もまた五の形を實文六年の
載る旨。下に其と考りて一〇のハ騎射の後よりもど打納
樂を奏りける也。源氏物語 蜜の巻二五月五日の節會より騎射競馬を
むらわへて後より打納樂落躰なりの象樂ありと見えたり花鳥絵情



五月。武徳殿の騎射。唐人の裝束。馬より下に越子を打つ。打越と云。其時奏する樂を打越樂と云ふ。

○後のきの物よえへ下學集
支安年書
卷云「を後うのむう。美帝とひゆ門まへくま。中畧。蚩尤が身分をば。
ばくにうちひくものとさのうちをす。正月よりかのまろとの中の人見を
ぬきし。木丁の玉うそらとよせた。云」
〔説くのあひわらん〕
於二歳初皆擊越
爲レ戯のうらわらる
塩農鈔文安三年春六及打又修之

世諺問答

○ 藪襄記(義經記) ともに越後の郡を入道の頭よりうそばへられ。當時のいふの秋のからうあるゆくあり。一あべ。後のきのひにたまむが如く。越後とどろへ推の秋へる。枝の葉とて見るに本を平ひしきとてあらうもよし。また物あり。リ

わが子のうれど。昔のこゝの越枝の推へりもひど。竹づきを打ひく。おととよる

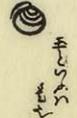
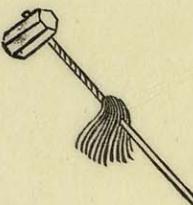
のよそよそ

實文六年印本

訓蒙箇彙

序載

○近古制越杖箇彙



和漢三才箇會

卷十七 嬉戯部

物の箇を却て云。按鍼打之遊戯。和漢共
其求尚矣。近世惟小兒爲戯。每正月與
破魔弓同弄之。猶近事耳。不用之故。本式
越杖見者希。此畧を編し時正徳三年也。
されば古制ハ當時ぞらうる者希也。今の
制のぞくにありしあべし。ぞらうる今之制ハ。而
ひのえ縁以後の物とあもん。

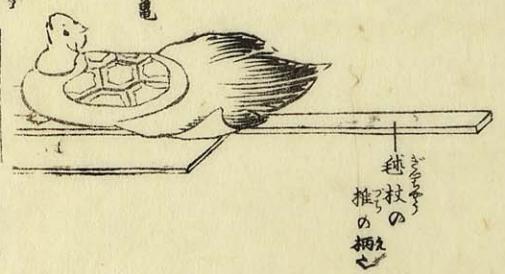
○京ある。青木す庵主人云。今京師の俗よ。小兒男女生きて初の正月。四方の親里
あどこうたの箇。今制のぞくに越杖をあつて祝儀とも。是何の所用もあく。たゞ
まづり去の希望ある。と。されば越杖よりもふ今入行の
不常用もあく。年始の祝いの如くもあく。

まづり去の希望ある。と。されば越杖よりもふ今入行の
不常用もあく。年始の祝いの如くもあく。

○今制越杖箇彙

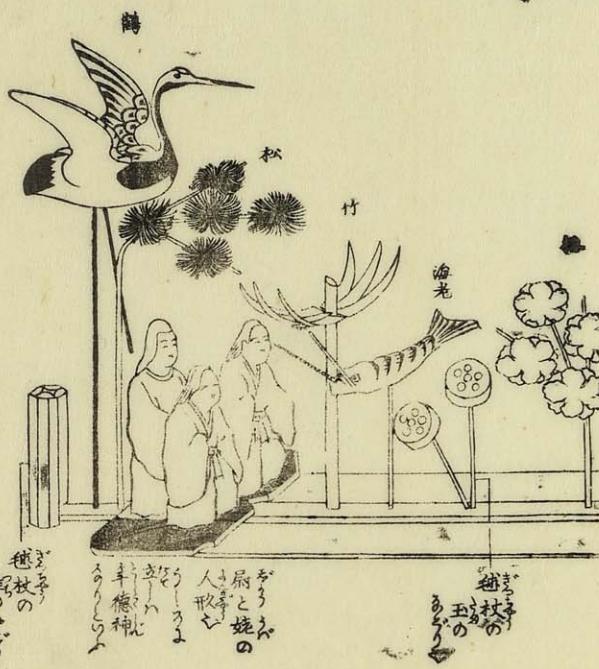
推す。柄えの端をもよ
ワタ。曲尺一尺八寸許
土をつる紙を筋。胡粉丹綠色
おもむろ粗糙よううな物。

滑然曾羅談 卷之一二三
當代ハ
幼兒は手を打を紙上又は薄



物より賤一鶴龜松竹あると達
西徳二年和漢三才畜會と同時
擇。蓄時ノリハバ五徳の前
モトヨウ今之此制又リ有る。

○云れ京師の人ハ目見れど
昔より東國うへらん
りのうれどに其真を
うへりつがよひを
ゆくの前も又さうり。



○鶴と松

卷一

○の名ハ古きて書よりまざりあへらば。近き昔造主始たる物ありべし。越杖と
同物ともちへひがごとへえ來別物也。本草啓蒙
卷一云「碌碡ハ田器あり。秋瓦の
始ふと六稜あり。兩頭より索ありて土上をひひて地面を平らむ。具あり。三才
畜會授時通考等より面を載せ。」

本邦正月兒戲のうちもこの形を象る。

○醒云。今此說よりて接よ。正月男兒小大りきりをあとせば。年始より農
業のうちびとを。農事をすむ意ありべし。古画を見るか。大なる紐をつけて。
地上をひく体をあやしく画げり。是田畠の地面を平らむるのまねびあらん。明王折ケ三
才畜會を考る。碌碡の長さ三尺。大小等々り。或ハ木或ハ石をり。はる
畜力を用ひ田疇の土を打。水陸通じて用ひとされば。馬耙の如く牛馬の尻ひげと
ひらひらする物ありべし。○大りの制作を考る。兩脇よりけた戸車の如きのひげと
地をひく斜力車あるべし。大なるを後より越杖をあらひ。その車をどう放ちる。

投る玉とし。がまぐの紐を持とうやぢら一推のうりとく玉を打とわへるる。玉
越枝とかまく。物のゆうにすり放たよゆづらを明。晉万治の比の古箇を見て推
當小さかず。前よりするべく。今へ年始の祝のまう物よどるのみ。何の所用も
あきりのとされど。左よ出と箇をアヒ考へゆべ。

羽子板

七
及

正月女児のりそめも羽子板の始詳うらど。按すよ
下学集 羽子板 正月ニ
かくのびくあぐをつける。諺子をくつるびく。下学集へ文安元年の各あくば羽子板。今文化十年より。がくと三百七年をくづく。前より物。その前よりこれの比うるあり。放
蓋震震鈔 卷六 暴竹の條。羽子板と云名のえ哉だ。前よりとく世説問答

天文十三年書 上の巻は「向てえをひいたりのこじひてつに作る」の句ある
が、その下の句は「かくもや答。されへきとあたうの、蚊よられぬまへすひすきう。秋のそらめよ。晴
鶴」といふ虫生まくへ蚊をさうす物あることをこの通りへ。本蓮子あどとえやう
からすくものをほけたり。これを板もつときあづればがつる時とんがうぐの

さうあり。さそ蚊をかそれへんぢやよ。ごめのことをほきゆう。さう

こととくほきゆう。林逸菴用

東兒裏毛才五
十二月市中の賣物をあらべりと處々越及
越杖部里羽古義

板」とあれば胡鬼板小作りの備字うそ。羽子木板の上畠放羽子のことを胡鬼の

ふともも板の方よりくれたる名跡ともあもうちれど。下學集いげスノの古書小羽子板こひよこわ。

胡鬼板とあれば後の日次紀事を證とへて決ぐ。あら古書をたら何故べ。

○まそ
私可多幽
万治二年印本
田舎人京のむじて。云での持物不笏をつと。羽子板も

やうんといひ一笑話を載たゞ。これにうそ。古制の羽子板の笏より似たらん。今のが笏は

ナガベ形タカラアモモとちひよ。ニ春羽子板ヒナタケアモモアモモ易シカク似タマ。

其古制の如きをあれど、下に坐と食をもつべ

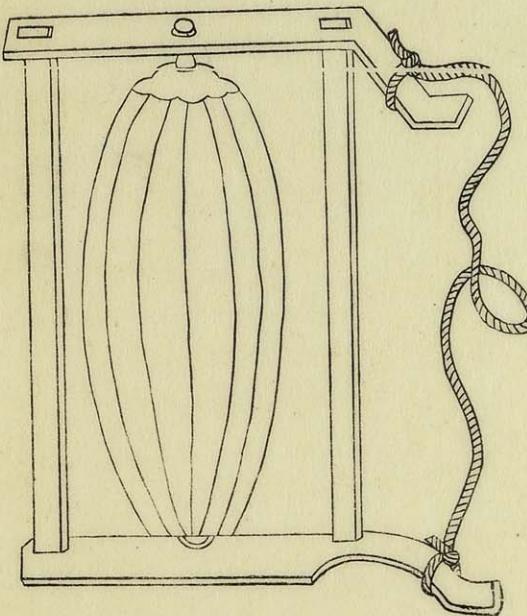
(3) 北嶺山。岩光山の外諸別の高さは、かくある。木の子をうぐす。又じだめどりやも。玩具の帽子と形のやう。日々の名べ、嶺山あたうらむんとひよど。

諸の松
トみ人あぐへひののまくをとくにわざわらの月
寛文三
壇山井
年刻
だをうなとお名もんたゞ。その義ハ殊考。

○研毒圖

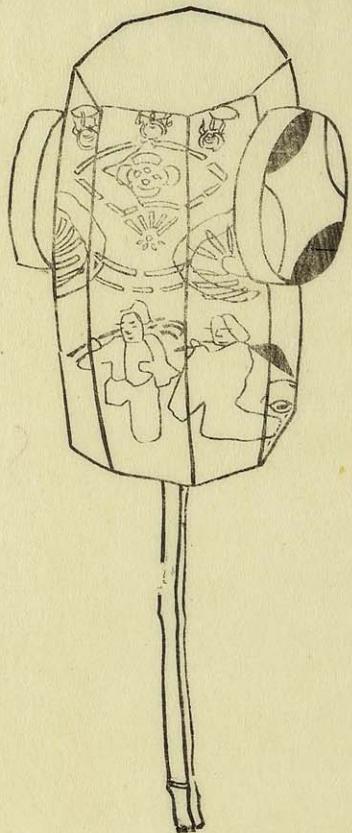
明王坊か
二才翁會
墨用十の巻
又此巻を裁
が

和漢二才翁會
研毒の巻を
りどき。但巻八十八
夷果立。欲子の
多。穀傳田番
也。本綱
見と
れ。



○研毒の面

され今京師
造の物あり。木を「角」
ありて、樹と焼く。鶴と松を丹青する。
り。もとから本地の挽物で、柄の竹をつくりしむ。
す。大ひらくから精麗もむちん。



曲尺の長さ四十丈
柄の長さ五寸余

滑董上編下之八

曲尺五寸八分

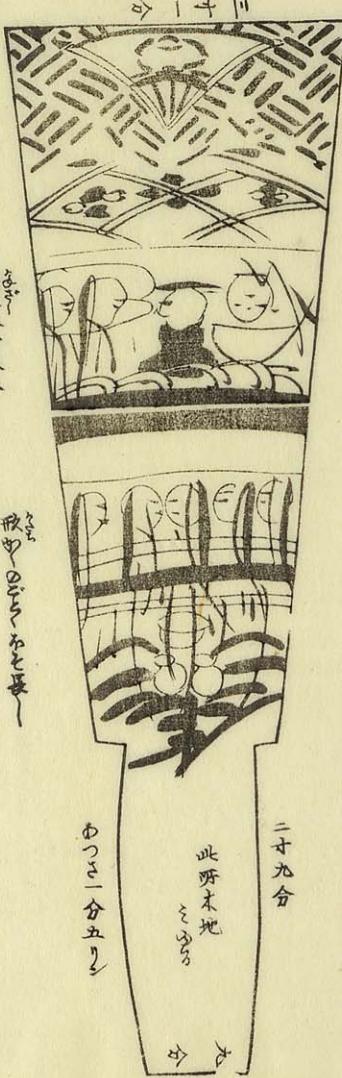
秋山のどくらを量

ゆつと一分五寸

此所本地
とある

二十九分

元治春。ついで傳へた。古御用。うるさく
御作實。表裏のうらやましく。裏は立派に
鶴をつくる。粗慥。うらやましく。えりまくら。
本地よ胡粉をぬり墨舟。漆青ホタケ。うらやましく。



四一九三

○羽子板古御

一



日本風時記

かんじか

○弱の木。弱枝。祝木。やいだけ棒。
四

正月十五日。粥を焼たり木を削りて枝うち。子よりぬ女の後を打ば。男子を産と
ゆふ。それゆえ古紀俗あり。卯枝うち別へ。枕草紙 卷十五
十五日よりかのせく

枕草紙

まうる。かの本ひきかへと家のこだら女房あらあうかよをうそいとくらう
まど。つゆうへを心づひあるかへきのあくまじ。うへとけるよらあらん。
うちあらだくのうとうひたもつとくべーねーとるひだ。
とくべーせよ。】**狼夜** 上 四の巻 正月三十日
換年・大祓
「年めうすれば大祓の日へとおもふ。十六日より
おもむくへとおもひおつ。おうげ祓ひをえ引くへば。かみどりうかぐひ
又とくめうとようひへたるをゆひかのち。とよのへおうへうれゐるを大祓
祓ひとおもひ。まろをわくまくとおもひだれもあはう。けん祓ひある
祓ひとおもひ。」**スラム** 「うらんとおもひどりのかく。打ちひだるよ。」

弁内侍日記

正月十一

2

卷之三

蒙古文

たをひるべかあどひと出給も三日もいづれはべづく。づくの日落
りんをあらねば。ゆとて二人をたへせんと云ふ。あらうべのあくれよ。サル
アラレ。醒さけ云。宿すくを考かる。宝治三年の後深草院御年うかびへうども。行つはまき
あらじ。といふ。金内侍かなうちしの内侍うちしの常つねある女房めらわ。
うど出候でひ。と云く。アハハハのぞげば。居上ゐるまへのぐづまうろづまうとお
なまく。權一納ごんいちのう。かへとありともねづか。あはとこあきにほえなかせひし
アハハハ。油あぶら。路みち。え。ね。くまかみが。へひよらが。のうらの門もん。うへうへ。ねづか
あらね。くまかみが。へひよらが。のうらの門もん。うへうへ。ねづか
あらね。くまかみが。へひよらが。のうらの門もん。うへうへ。ねづか
權一納ごんいちのう。

打ちひびねかうべたはえされば月を逝と名こそす。卷
下の巻。建長二年正月十八日の余よも。あく枝のタネをえれど。ちうべすゆふて。こくに文書けれど。
ひらし。此日記ハ枕草紙さざうもこう。かくと二百年不ぞ。後の物あるじ。あく枝の事。のち時もほ
き。これらをひひりて。古代觸枝打た。このを知るべ。○後の世の

物見ええへん下組

四。十日粥の枝より打吉ひで勘禁中今も粥枝より

女房とうべ男を生むとぞうて越前あどひへとづきとく。本文。

不知也

天正十八年

日本歴時記 貞享五刻

卷之二 正月十五日の條より云

今日粥枝とぞ

松枝柴うどよと女の腰をうぶのをうじまうすいと。今もさうりあり。但

今的小兒の戯事とすりそ。

北園より松の枝を五色よりうどくとぞとみそ

女を打刃わら。西園より棒より女をうら呼ゆり。

日次紀事 追加云信卷之二

等の圓よりて。漆膠木を以て其長サ一尺二寸許より切上下より削掛て先の
かえ左卷欣或ハ柳 櫻花の如き物を紙より切粘して松煙を以て邊を燻
其欣を取除ハ其模様白残る是を手て捧祝棒と云。新婦ゆる家毎入
て新婦の腰を打。児童の戯也。

日本風土記 卷之二 時令の條より云

造。明朝よりもきこえりるよ。

日本風土記 卷之二 時令の條より云

元宵 正月十五日 云 二・但 街道郷村ノ児童年及二十五十八

九 巳 上者各取柳枝去皮彫成木刀。枝を木刀と以テ又
外纏子 刀一上用火燒一黑去皮以分黑白之花一追加の説文有
名曰荷花蘭密一茎有三葉再取箭棘之條抑供香火神前
次集各童手執木刀隊闘于途亢有レ簪久無子之婦
將木一刀一遍身打レ之口念荷花蘭密必使此婦當一年有
孕生男云之全浙共制日本風土記を旨の多きものと云。書の名あるは
人養草 東享三年著卷之二粥枝の本をたゞして云今も北園の方より枝の本とて。
雷盆植のどくある丸木に鶴龜松竹宝づくの繪を彩色幼男ども
大の子と云義也。隣相を作りて童のりてのそびとく女を祝して大の
きの子を持たまると云義也

書言字考

謂之枝木

年中風俗考

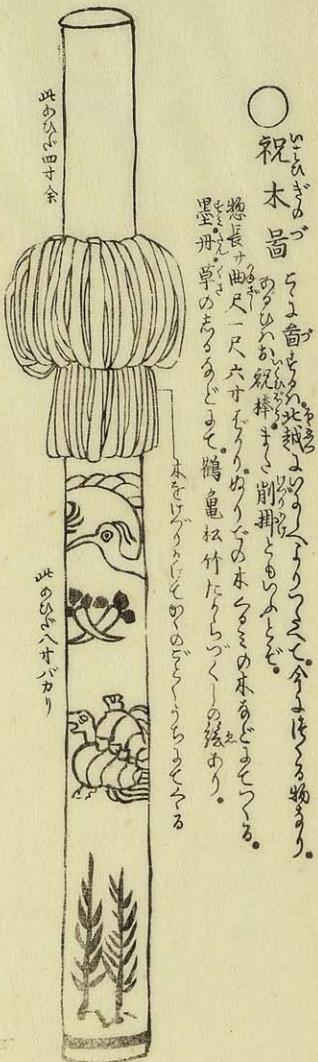
貞享四年印 本上の卷。正月十五日の所より云「たののころ本。
大の子と云義也。隣相を作りて童のりてのそびとく女を祝して大の
きの子を持たまると云義也

年中故事要言

享保三年印本卷之二

桜の。正月十五日より新木を削て其削屑の縷の如くを。枝の頭に張
 て名と削掛といふ。是より女を替へ大の男十三人といふ。然ども其義を知る
 者有り。是も男子を生くるを求る祝木と云ふ。勝軍
 番を北越にて祝木と云づけり。又傳て今より造る枝ある。勝軍
 木も又或は胡桃木を造り。春初男兒ある方へかうづきを餅花とも云
 一ツ所の掛莖。小正月よりうそ。男児らとをたゞまて。新婦あるあらわさ。
 新婦の腰を打まひびき。子を孕む。又祝木と彼地の方言
 云ふとぞ。され全く古代のゆゑ枝の遺俗あり。日次紀事 婦人養草より
 云ふとぞ。勝軍木と云ふ白膠木のことぞ。

和訓祭
 もちばゑの翁より云ふ。諸國とも新婦を送へ正月よりあたまと
 祝木の神官めぐらすもあり。云々



簾中舊記

正月拂はえれりといふ條より「十六日せめたとく」。

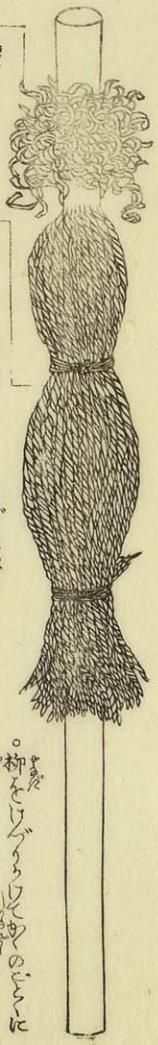
左義長

表
 らりとよそに後後してのらりうりのねふるを。一樣いづれりへくは女房元の右
 のれを。乃へを。二はくそとぬうらひ。その拂杖よりうひがぬ。おんじよみて
 おらとぞくをかうれり。春乃時めりぬあどろく。おやう多よあれりよそ
 即とぞ。東山殿のころのゆく。が。枝の遺風。のらうひ。おなまに。嘉樹のゆく。おと
 わかる。枝よりをえがき。大なるをあらうり。おなまに。安慶よりのゆく。おと
 ふを産。屋上ひくとめう。とくろぐ。おらん。右の北越の祝木より。も。うれあらう

○やいたけ 棒の扇

又祝儀棒のものとて

それが羽衣をつけて造る枝と。毎年正月十五日道祖神のまつりとて、男のわらわれをうつを祝儀とす。ひしめの腰を打つて、それもわら枝の遺風也。本より車中故車要言云々。美濃の御持とつみりのうけふ。○あれよもと。正月十五日軒よりげりあくと云ひの考へ別よあす。中編より載せべ。



○か乳母 日傘

さひの謗

五

今年の世の中いたる人よむどるよ。か乳母日傘もそぞうたるがむどりの謗ゆ。昔は乳母をやつからぬあるべに老の因とて日傘をさしてからゆるよ。まへりあつてのうちも。えんじや。舟青りとさへの後をあきとててに菱川が絵よりやへえて。延宝天和貞享の比

○か乳母 日傘と
りの謗のり

まれぐれ今よりもと百七八十年

前算承のところの後。

育の民の女の質素の
風へ。今田舎のかよ。

かのくらのとれるを。

け古画を

たべべ。



承応明暦の比。か
女の髪のとて。やうべ
のとて。だらのびんもうべ。わづがふらうだらう。ことくやかみだらのことを。

○ゆゑの名義ひりの假字

四

和名鈔
雜
和名此奈
契沖雜記
雜

日本靈異記上卷三

和名動 雛。和名比奈。契沖雜記。雛。ヒナ。ひなひーと聞ゆること。ひな鳴ら。體云れ
ひなの名内 玉ノ御ま 卷人の歌をひひき。作りて。これらものとひそび物を。物語
うそもにひねあそび。それからひまへはくれるを。るのひなよすがとくらべる
名す。字も雛とゆき。今の人も。ひなといふをうそひねるとわざる。ひ
詩哥をきく。四時をあいだ。女房をあそぶ。うそとひまくらべる。ひまくらべを
引て。うされば。假字ひひなとか。べきを。かとうけちにたらぐ。物の離散といふ。
われば雛の假字。うれども決々。

書紀 卷五 崇神天皇十年九月童謡より賣那素寐殊望
御遊の事也 古記事也

古事記傳 卷二 比賣那素寐の契沖か媛遊りと云ふ。由めぞ。媛
遊りの天皇の美女を集めて宴あらぐ給ひを云ふあるべ。かくよへ比賣
那素寐ハひのる怪ひの事もあらず。又ひる怪ひ三十一代敏達天皇二年。
厨戸皇子聖德の幼くかほまゝ時より嫁れりと云説。近き世の物もあらず。これにて或偽
書ひまどひたる説あれど。ひもたらぬがことあり。されば難怪の始詳すらど。

大内
離社
離合
危

۱۰۵

齋宮女御集 うりかひせー時ひくわねびよ神のまことよまくづる女よ。きことくも
ゆのと物ひうと。そのゆくこーもだくぐーくどもやかにことそじたさうりねれ
せえー 一神代うりかひとどきあら物をゆめりありひよぐあらん。あくびが
社のあらのゆ。紅葉らる和うそ 一風うそや神のあらうそをもらからんを争にせらみゆ
ちのゆみらうそ 一接うそぞれひゆ想うそひく神すうそをほへひまひまひまひまひまひまひまひま
。。。。河背 一神のゆみらうそ 一神すうそをほへひく神すうそをほへひく神すうそをほへひく神
あくびだ。かはらのあくびだ。にほくま。ひくみのくまのくまのくま。たまらもげのくまのくま

此年
仙ヲヲ傳哥考

末摘花の巻

○ 源氏物語の離遊

九

紅葉賀の巻

末摘花の巻 例のりうとゆみどりのをばく 沢
比比奈遊 舞の日 沢の日 あともま
とあると かとせん 朝舞
時へ あらひ十九才 くどうもくすみあり後とそ 月元日 朝舞よ さうのをじゆめり
天曆の えいじゆくとがをし くふすくへあとくすくへ波あつりやとく。うち落とゆる。ひと
ありらま めぐらすゆづれあつり。ひくらひのきそーじ多てそくあゆつ。あらうさゆく
く 古事記 沢の日 あともま
三尺の くらへひとくろひよ。あらへあらひを多て。うちひうてやどをばくへア。
屋の日 あらひとそく あらひとそく あらひとそく あらひとそく
あらめくをゆるを。ひうの屋ふせたまをあとびむうげゆア。あらひとそく
追離

それをこどもよりれば
大君とおもわつてがまの事
つるひどるをとひだ
うからをほほよびあふえ
うとがいだり。けよつてくろあた人のあそざるゆゑうれしよつてうきせんぐ
うらん。かくことりとく。かくい絃をとく。宵一日まだ出でかへりとく。本せんじを。
拂民本内す出ゆく。人々けちきゆく。かくはが房。うつむかへり。うつむかへり。うつむかへり。
機者あどまきへり。
ともまくら寝くひひ中の添氏のうつむかへり。肉よそつかせあど一晩
添氏うつむかへり。ひひを。うつむかへり。だよかとあびきをあく。とくをよあそくうる人。ひひのま
めをひひのまくらぐりのを。云く。は時宗のう十一がうりられば。めとあひ納言。がく御に十
きまあるをうらあそくをあく。そあくらうそをそれば。古代のゆゑみねびのさるを。今日のみよ月日。あ
そちまし。今世の女めの奥のうつむかへり。あそび。ひひうそをうらあそく。紙ひきをつう。いふくに基
うれは基。うと多きつけ。くよもくへる。もむらうそへき体をまくびりと。
持がよつてたゞくがる。今世の女めのうそを。母のうそへり。母のうそへり。うそへり。
みのうそを。うそへり。うちよせかへり。うそへり。あくねば。もうあき。花紅葉よつけ
ても。ひひあるあそびのうそを。ねんざうよナフりれありましと云く。うそへり。うそへり。
も。ひひあるあそびのうそを。ねんざうよナフりれありましと云く。うそへり。うそへり。
井の底の娘君と十日うちを。ひひあるあそびのうそを。ひひあるあそびのうそを。

野分の巻

骨董上編 下之前十四

人ふらひて。あゝぎのをよむにまわれば。ひまきことかがひたるを。かくく
れど。あらう。と。ほりう。うけ。ほとのあつひよびと作りあどる。」
ひるふ。船
を。あらう。望。浦底のちんす。タ露の。晨明石の。蠍君の方へ。ゆべの。神かの。まちひと。のち君の。夕霧の。卷
を。あらう。ひみの。夜うくも。くづれ。と。どひ。あふ。おーの。お君は。時七才。ひづり。
君達の。雲。井の。あそ。あそび。ひの。おはく。と。ゑく。あそび。絃。云。こ。とも。八月の。意
めげまたの。卷。あろき。たぞ。どもの。かよ。びう。あ。よ。あそ。まそ。と。か。一。ナ。そ。あく。に。家。も
あたひ。まを。あせ。たう。と。まつ。と。まく。」
ひの。秋。月。さ。の。と。な。の。八。夕。き。の。八。月。の。事。
古の。ひ。ま。秋。へ。く。る。あ。の。を。あ。い。ス。べ。

○ 古書どもが見。テ 離。拵。く。ま。べ

十

宇都保物語 横上巻下 「おての。が。り。絃。と。ま。ん。と。う。す。せ。と。た。そ。ま。く。あ。く。ば。ひ。い。す。
ま。く。と。の。絃。」

よ。ま。く。せ。ん。く。ぐ。ら。と。の。絃。」
云。大。宿。い。お。う。な。の。ね。ひ。そ。め。大。宿。い。お。う。な。の。ね。ひ。そ。め。大。宿。い。お。う。な。の。ね。ひ。そ。め。

云。六。才。よ。あ。い。あ。り。小。母。い。朱。雀。院。の。女。一。宴。
の。大。宿。と。竹。け。う。れ。ひ。い。ま。じ。と。び。き。お。き。う。た。絃。を。云。」
和。云。ま。く。こ。ひ。あ。き。く。く。と。の。つ。十。も。う。り。う。そ。ま。く。う。う。く。く。う。ひ。い。る。の。ゆ。

と。と。く。く。く。う。き。は。舞。の。わ。ど。よ。か。う。と。よ。侍。從。中。納。言。行。成。の。ひ。め。思。

と。と。く。く。く。う。き。は。舞。の。わ。ど。よ。か。う。と。よ。侍。從。中。納。言。行。成。の。ひ。め。思。
の。春。御。堂。開。白。道。長。久。の。御。子。中。將。長。家。て。お。年。十。又。六。と。う。り。と。か。ら。

う。め。び。ひ。り。を。く。絆。れ。ば。御。堂。底。の。絃。と。ひ。い。み。あ。と。び。の。ゆ。う。み。と。か。う。と。か。う。

と。の。ひ。あ。ひ。一。と。

一。封。の。ひ。あ。ひ。一。と。

天。主。の。お。ま。く。ひ。め。ミ。や。一。品。宮。を。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

よ。出。で。の。ゆ。と。た。と。

をほうどあるばかり。けみとどたとくのねばからず。あらめぐらう
うれきどりのひもだうごゆべくひす。それひりひともたともとくもとくを
物う。云い。○オサハ若水の巻云「うきみの。みとのうちうを
ひを詮をされば。中畠内ゲのりとあさゆうと。かくよまうとくもくもく。
のひをあどふぞ。にまを詮る」**袂衣**卷三「諸ともよそひや詮ひてびいを
ひら詮へよ。もら詮へてこゑにのそびとあひ。じとくにくまを
まつらん。けり宮のあくね詮へるのそび物どうもあてまつらん。云に
袂衣大將浪子七才よめひの君をひらうとあふよ。同書卷四「あきだ殿君一才
よく。さくらぎをあせよ。今とあらうるをあべし。」
大内一高りあへるぬありさぬをひるわよ云「ひいあを。一とくするやうよ。
ちまくううげみて居詮へる城。云。」**詮**上の巻云「たゞじとくぐりと
のむがく。市丁のうちよのまうびりれりつ。あきびりみあそび。ひかわひをぐ
詮を。」**増鏡**四二神山の條云治二年四條院代帝御年十一月
詮を。

○離の調度

十

元服の故接政教実父の娘君九才よすりあふ。女房よもりゆく。而
きいたの事をひるてよ「女脚もまくやくちひまくもすれば。いああそびの
ゆうみそとえさを詮ひける。云。」源氏をかく。此うに治の年まくとあくわれば。がくと二百三
四年なり。後うれい當時のひう接政も。がくとてゐとくゆる。
これらの文がもをかりひまくして、ひくのひくの詮びのさぬをあるべ。

緊式部日記卷上東門院。皇子を産あひ一事をひる巻云「り宮の清
きうあひ。一納言の君ひんぐにまゆりとて。らひきたぬだ。」基著
墓。別演のだの。もくのゆくと。ひくの詮びのぐとすけ。あらわす。發生のよろ宮よもをあく。基の
ゆくにまくと。れひなねびの具。ひきき。勝機鷹塙。ゆうのあ。かくあく。調度。
かれらのあひ。ひのあそびのとくと。もうまく。うたり。傳よ。ひのあ。とくと。えうり
瀬松中納言物語二の巻云「ほどりかくに。娘君ニよありあひられ。お稽着
よまくびんにまくと。まくと。まくと。娘君のほかひととく。らひまくは調度

どもよし。ひまわらびのやうにあつひて。おこ
調度も。うつたはりのたゞぐ。そのものひるみ。宮中せんじとあるにわづのねがひあれば。うづく
遣り。うづくべ。うづくの民の童のひるみ。夜は小朱びる。ひあらひの草のたゞぐ。
舊素
さつき

○ひいか女きみ

[天延二年五月四日]

[十二]

あけろの日記 下の巻云。けかゆるひめのさくらむ。おねいととほくらん。人かの
まくじ。さくらんともあきみとおりひ。おなれ。然お給と。寄来。長
たこまくらんともあきみとおりひ。おなれ。然お給と。寄来。長
ちそが。うりのひ。難衣。三道。這ひたり。あくびひどく。みくうどりきたりける。
ゆきのひ。うきのひ。うきのひ。神。神。神。

あろまくのころもかくにあくびとむ角とぬ中にあつてあくべ

まき又え

あら寝され。ほぬをうちわ。我下交。夫。妻。通。隔。返

又

さきの裁

作 備

かう夜たるやとぞるらちとぞるかとぞくよたのじとあくべ
接するよかくよかうれい。日記の作者。東三條攝政兼家の室道綱ア
の母あり。父の寵かとうへた。とあげき。是等の哥あり。さよひの母と
りく。今離形とひがごくへらひとぞ衣服あるべ。それを三ツ縫て。や前よ
右の哥を一首づめたつて。神ふ進た。うす。今世の女の童。栗嶋のれ神
を神うりとく。紙離ひの形。袖形。又ハ涅や袋。アモ猿あど縫て進。ハ
これらの遺意すやあくべ。さよくにこまくのちる葉。すま。古事記。不
くる。栗嶋の神歩彦名命ハ高皇產靈尊の指間より。漏墮ゆ
やどめらひさきかこらあれば。離をたとへる。も。~あくべ

さつき

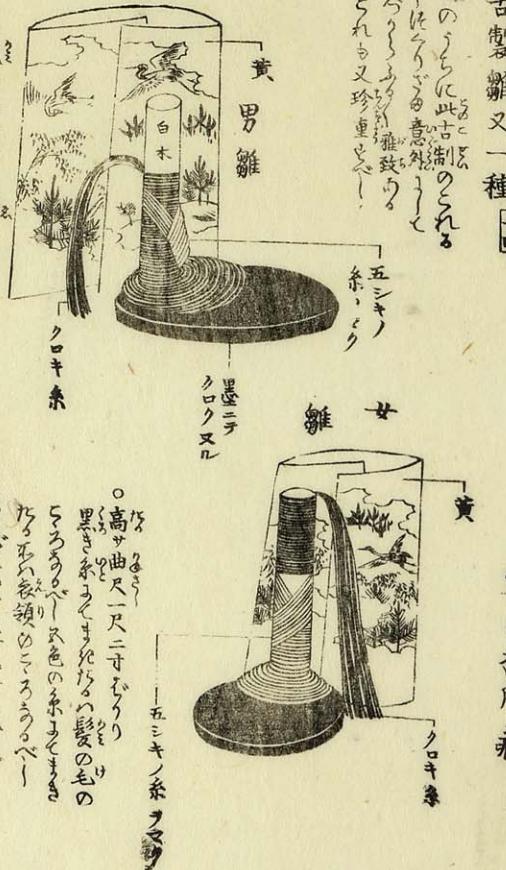
○ 古製雛圖 十三

此圖かのれが得ぐる摸本と
眞物とたゞそぞろめどと
ありつゝやゑよくぞばらの
他日眞物をうしゆべ

源氏物語 若紫茶の巻よ。やまきみのうのまわをとひのあふ。あゆへりゆふ。源氏のまことつづり。まつりしきのまきを。びきゆ。じてくす。あのうへはてん。十歳ばかり。かへどくねはのうへよづれ。ひづれ。あひへよづれ。かへどくねはのうへよづれ。それを上にあひてからせられ。筆のついたてよめたつだ。

○ 古製雛又一種 十四

四國のうちに此古製のこれ
のうへよづれ。かへどくねはのうへよづれ。
あざれも又珍重也!



○紙工房表松竹の餘とあき
丹をよろこびてのうへよづれ。
なぞこうういはうてあ
しそれ衣被のうああるべ

○大小異同構體もあるべ

時得庵所藏



○同背図



十五

○室町家の比の離台

○同女離台

○同背図



○同女離台

○同背図

○伊勢の小朱離

十六

離絶の記

全二冊 寛延二年印行

伊勢の神宮へ。昔アリ女子のりそなび草す。小朱

ひのひとそじひまき男女乃人形を作り。岐宜とそ衣腹を着せ。家基室乃上より居て。夫婦しつはした離ひをかく。折ふとゆむる云ことえたり。

ちのれば事を。伊勢山田の某氏よひし。伊勢山田ゆうに立つ傳へ

て。安閑平日の離絶びよ。小朱離とも。又六分許の紙ひるを造りその衣腹小

ちるのを。とりひ巾一寸許長さニ寸許のちひまきの子もとの紙よ。

丹青りて文様をりうだり。或ハ行成紙あらんをちひら裁て用ひ。或ハちひ

さき紅絹のまれうどを添て。表領つきをこゝにあす。そも身の子もどみ

巾ひまきひの紙よ。坐敷客間居間墓所あと家のそ一箇をめん。小朱ひみ

支婦。或ハ婢女奴僕もどもにうて。そのそ一箇の不くよ粉一そばに。

人家平日のみまじまき体をまびびて。常のりそなびよある。今

より八十年許前。享保の末まごく事めりが。今へたとて小朱びよとひ名を

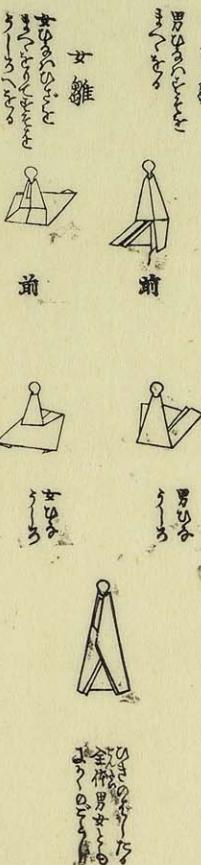
なよあれ人稀。年八十余の老人よめぐらあらざとを名を

なよれ人稀。年八十余の老人よめぐらあらざとを名を

今も伊勢の山田あつたと。孩兒小ううどり一物をうへて。まへへとく
又ハ端午の懶ねこきどをえせて。懶ねこきくとひ言残のこす。まへへとく衣裳いわうをきこ
めさむつゝ。まへへとく衣裳いわうをきこ。まへへとく物ものをうへとひ言う。まへへとく言義ごぎを知し。

○伊勢小糸離ヶ島

伊勢山田の人。年八十餘の老女。幼き時にひもをつづくのをかしこび
とがえ居て。人よそへつづいてうらを得て。うらに賣つて。一
切〇大サ五六分ぢう。全体紙あり。頭の男女ともに紙ひおり
なり。



○三月三日の雛遊ひなあそび

古代のひいな遊びへ。平日の玩あらう。前よりあるが如し。三月三日を期とせん。
おそれの比放詳きよべ。塵添塗囊鈔 文安三著 卷之一よ。五節供の事をもると
べども。三月の節供の處よ離の半ええざれば。文安の比ひよど上己の離ひよど
うべ。又拾芥抄 上之卷よ歳時部をきめられたれど。上己の離えんうべ。塵抄と
世諭問答 よ民間の年中行事。童遊のりやくを載めひたまど。三月
二月の條よ。桃の酒。うさぎの餅。雞合などのみよ。ひよ遊びのりやくを載め
天文十三年に續かれて。興肩よえられば。上己の離は天文の比もよだ
きひよ遊び 無言抄 イ「離人形の事也」とのみりて季をさげめど離げば肩に
まづぱりしり 御傘 うの離を新とて 喜山の井 寛文二年印行 三月二月の條よひよ
天正七年より。二とをあまり小うれを記ととられば。天正の比もよど二月。二月小さど
おもむけり。期もよづねば。打まそとてば離あらべ。云く。但取めひーらひわづば。比の條よ
おもむけり。とあり。是等を合せ考るよ。三月二月を期こぢ。

とおがくぬのあぐべ。天正久後の夕歎。三月上の己の日水辺より被らる事。和漢
ともよ古一源氏物語。次磨の巻。源氏湧廣へ左近の時。三月の朔己の日
も浦邊より陰陽所をめぐる祓ひ舟。よどみくじら人形をのせて流さる
後ひりええ加茂保憲女集。よか不ゆきよめきをもさうどあゆぐへりその人
のあらをこらへらん。あらもいれは。上己の祓。天兒を水の流せりゆもありしるべ。
後をよ。三月上巳を祓事の期とせし。是ホの遺意。天兒母子ホの贍物。酒
食を供へり。うづの凶事を免よからせ。かのれいが身を祝ひ。がく古の雛祭りの方
すうづくひ。今のがくふるれるうづべ。國朝佳節錄。三月三日。兒一女
江蘇第一のことを制二紙一入。爲レ読者。贍一物。之義。乃祓一具也。云々と云ふ。然則原潔
身の神事。すうづく起りたれば。今のかくふる祓事といふ。雛祭と林とも。湯も。湯も。

とやかくぬるあべ。天正以後の文様。○三月上の己の日水辺より被を事。和漢
ともよ古一 源氏物語 次磨の卷。源氏須廣へ左近の時。三月の朔日巳の日
を。浦邊より陰陽師をめぐらし被をすて舟よろしく一人人形をのせて流さを
浴ひしりええ 加茂保憲女集 よいかが不ぬまよかきあひうどとあひぐらいくその人
のうちをさうらん あらもれれば上己の被よ天兒を水よ流せりもありしうべ。
後事。二月上己を敵将の期とせし。是の遺意。天兒母子手の贋物よ酒
食を供す。りくの凶事を見よからせ。がのれくが身を祝ひ。がす古の難怪びの方
身の神事よく起りたれば。今のかく敵将とりとも。敵祭と称るも。湯うる
まかくさりけを。

○唐國の鏹人十八

家業のつむじひなねばとそのまゝ後びとなり。まゝ別まゝいわゆる。本意しませば民の
童ひどくに餓りへりをもみだされまゝ刑罰。家内ひどきまき儀をも施行し簡素をもひと
しく。美巧をもあらむまんたことなど。今のみせの女児。男女の御子をほくとす。夫婦。ごとく奴婢の
あると身をほどく。うそ中品のひのみがつともあらむ。伊勢の小糸ひるもかうとといふべき。
○唐國の鏤人（さくじん） 十八
唐國の鏤人（さくじん） 十九
文昌雜錄卷三丁云唐歲一時節一物云三月三日則有鏤一人云
事よりらるる所とぞ。とあり。歳時節物。年中行事。名物六帖云。鏤人をひみまくりと譯すれたり。やれハ二月
三日の雛。唐土すハ唐の時をも。とあり。文昌雜錄。宋元英が撰。うちば書。高麗。○静序。唐土云
ひみの。ひみ。勝をひると譯すれどもあらむ。勝の婦。女めのう。也。

離繒櫃

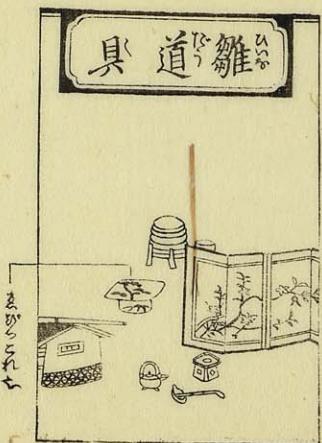
寛永より元禄のあひだの繪ともを参考す。當時の離扱はりゆく質素
きいたたゞ坐上の衣服もそとをゑびのとす。壇をちうらひとす。
三刻。倭俗以紙作小偶人夫婦之形一是謂離壹對其外
卷七。大人小兒之形各造之。女子並置坐上云く。これらよ
也。知るべし。其角が五元集ニ殷のひよ清水坂を一目ゆ。とて發もあん。

骨董上編 下之四十一

なまく段をまうけるものなし。飲・享・帰よりと一段をまうげたる畜あり。下にわらひを
か如一〇そと當時ひるの繪櫃ともる物あり。その畜をうるべ。飯櫃形の曲物にて
蓋へ方す。祝ひの絵あり。江戸芝神明の先帝賣ちき。櫃とり物よ似たる。
一雪が居骨明晋中撰正業がひる齋の絵ひのを祝ふ三日哉。嵐雪が其袋縁を
三年かと今か山崎の櫃買つてよ離あそび續猿蓑ひる槐市が白雀子や
姉よりひひ離の櫃ひとく雍列府志卷七正一月兒一女所用板櫃云ひとくもとく
越一杖羽一子十二年イタシヤウニト吉モチル所用板櫃云ひとくもとくアタヒツ
印行の物よ「商人よ桃の節句をうけの絵ひ」と云ふ。二月の末さゑ
ひの絵櫃賣と云考めりきひとく〇土左日記下承平五年ヨリ正徳三年
ひの絵櫃賣と云考めりきひとく〇土左日記卷十六ヨリ正徳三年
印行の物よ「商人よ桃の節句をうけの絵ひ」と云ふ。二月の末さゑ
かくもとく。うちひとのうきをもあらねどぞいふ。拙サクのふとん假想するに
あふ。時ときは小室あきある。べし。ちひとむじよ絵をうき。在家の賣物あるべし。或は歳と
云ふ。小室の絵。ひのき櫃。絵をうき。うらべの力を發揮する。謂云かれれば小室の絵をうき。或は



○貞吉五
辛卯本 日本歲時記又載名難遊の篇



○元禄元年印本女用訓蒙箇彙

當時のひよせびへゆくごとく
段をよこりてたゞ坐上は
生物してどもものあつたら
多くむかひの質素をとるべ

○元禄十七年印本鳥居清信が
むけらの絵のうちいはし書あり

○寛延二年印本
船持の記より載る
絵ひらの巻

○享保十七年印本
女中風俗玉鏡上
載る巻へ當時へ
りのどくつらう
一段をもくじへ

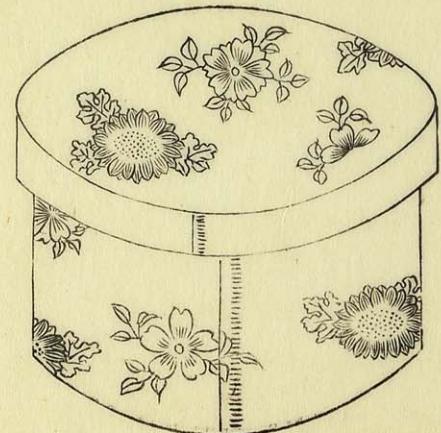
接よみかのぐく
達子紙ひふきよどく
持よせりまきよどく
立綿ひきよどく一九
今もひきよどくとりよ言ひのれり
まごとあをひきよどくたゞみ
ひどそれとの別するべ



諸国奇遊談

寛政十一年刻
よ。絵巻のみを以て存す。

「今も洛北の村里より、三月の節よりどうぞ
必用ふ予が幼時ころより、於ても
用ひへ由る二月の末より賣ありまること
きよ。今へたんてつあらうど、今画
そぞの遠闊。又洛北の今の形を
ぞふあるを」とひて、此巻を生ぜり。



○ 醒

接よみよ此絵ひらよ櫻と菊を

やけるべ。三月のひなと、九月の後のひなとを
うけたる絵うべ。されば世の制あればうべ。

○ 享保の比の土雞 番

二十一

男 高サ曲尺
五才金

緑青



主と土をりそ法くよ燒て。胡粉丹元緑青
あどくいふと。ありがくら色あ。
からも享保ある後の物こそ。
深草ゆきそりやくん。
ちの質素まと
名だれり。

今も御草
みて土の
内裏ひもを
つるすれと
りふる
しを



今も田舎より。すす生れくいふめの三月の節句。江戸の令戸焼の土びるののひをまくらう。
祝ふ。とくに吉條川田舎より。異例の田舎も土びるをりらふと。元。

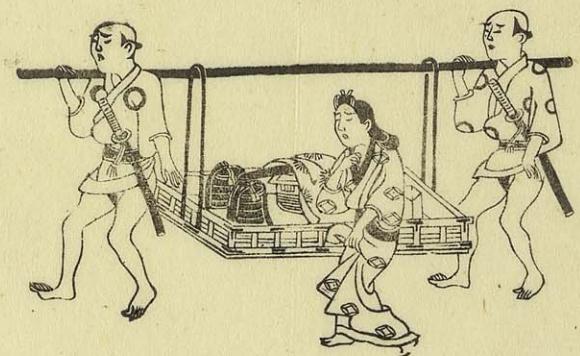
○ 離使番

三十二

西ノ物語 わが心性
おはなこせ
み云 黄へ二月云々

女難持めのむすび

おはなこせ



○ 天和貞享の比菱川序宣がおりる
年中行事の印本より此番あり

奉公 本朝食鑑
俗 三月三日 爲節物供
祭りとあれどそのかども白酒をも用ひたり
元和十六年印行

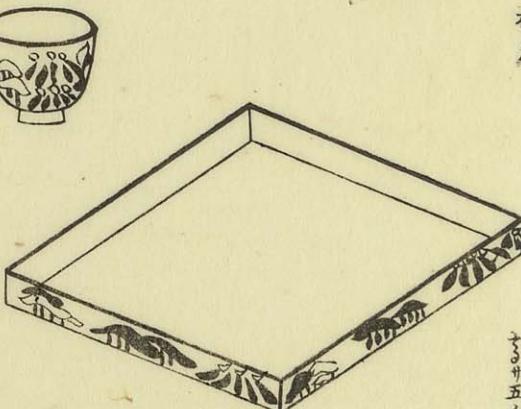
あや 興 海 きの上の上の上ひめりがさき
せら 雛のつひの酒の弱足 布巻

折敷方三寸三分
すこサ五分

○ 雛 檵 折敷圖 三十三
榢の挽物の本地うり。折敷へた木の
さくのつきのうそ粗糙よしもす。
されも本地うり。丹綠青うそ。松竹の
絵うり。京師より明和安永の比
きをあく。古た物うそある。

あく。古た物うそある。
まうそ。古た物うそある。
贅糸うそくと雅致あり

椀
わん
一分余
わんゆ
五分
わんご
切られ



京都青李庵藏

○ 後の雛 ひな

三十三

後の雛の事古き物よりまことにあく。元禄以後の事う。べー滑稽雜談

滑稽雜談

正徳三年撰
卷十七云々「後の雛 九月九日 和國の女兒ひなねびをうそり。古き
物語のもゆき。上巳の節より抜ゆる。三月の節より記す。今又九月九日より
賞する女兒多し。云々俳諧是を名付て後の雛とも。其上巳は對して謂る」

晋子十七回

享保八年

刻

享保八年

物のあそびうき

後の雛

正徳享保の比ひどもよし事へ。今も京大坂などよりある。されど二月の
如くどもゆき。雛を一つ二つ出でてゆく。それもえぐくわらうと。されど
のみを立る所ゆき。或へりと。其實否ひあく。

吾山か

朱ひなさき

みづみの塚

みづみ

の塚

とおねだり

とおねだり

娘丸の漢名を金鶯蛋とり。形鶯の卵よ似たれがあり。元禄のあ後女兒

○ 姪丸の雛 ひな

三十四